

函館で大成功！ ふるさと太郎代に道路をつくった小熊幸一郎

1866（慶応2）年、太郎代に生まれましたが、8才の時、新潟で回船問屋を営む叔父の小熊幸吉の養子となりました。その後、22才で函館に渡り、樺太（サハリン）を漁場とした、北洋漁業の仕事を始めました。幸一郎は、漁場までの時間短縮のため、帆船を汽船へ切り替えるなど、合理化を進めて利益を伸ばし、ついには、函館有数の資産家となりました。

また、函館を北洋漁業の基地として長く繁栄させようと、冷蔵機能を持った「小熊倉庫」の経営などを行いました。ほかに、市立函館図書館の建設や小熊育英資金の創設など、文化的な公共事業へも多額の寄付を続け、函館の発展に力を尽くし、「函館の恩人」と呼ばれました。

ふるさと太郎代にも、砂丘を削って道路をつくるために私財を投じました。当時の太郎代は、高い砂丘に囲まれ、新潟へも新発田へもその砂山を越えて行かなければならず、荷物を持ったり、荷車や牛車を押ししたりするのに、人々は大変苦勞していたからです。1915（大正4）年に太郎代観音わきの道路を開削し、また1920（大正9）年には新発田方面に通じる道路を造りました。

太郎代の人々は、そのことを感謝し、太郎代観音境内に「里道改築碑」や銅像を建てました。1937（昭和12）年に建てられた銅像は、太平洋戦争のとき

に金属回収されましたが、戦後に再建されました。また、幸一郎がつくった2つの道路の分岐点にも1922（大正11）年建立の「里道修築碑」という石碑が建っています。

幸一郎は、1952（昭和27）年、函館で、87才の生涯を閉じました。



青い道路が1915年に造った道路。緑の道路が1920年に造った道路。東港の建設によって、現在は、この区間だけが残っています。



里道修築碑